

改訂の序

本書は初版が2009年7月に出版された。この間に4刷りまで増刷を重ね、多くの方々に手にとり読んでいただけたことは本当に嬉しいことであった。初学者向けのわかりやすい書籍を提供したいという本書の企画意図が、ニーズと合致していたことが実感できた。すべてのイラストや写真にわかりやすい解説をつけるという工夫も理解を深める一助になったものと思われる。しかし、心疾患の診断法や治療法は日進月歩である。すべての原稿について担当執筆者が見直しを行い、時代に沿わなくなつた部分を修正・加筆し、改訂版として出版することとなった。

さらに、新規に項目を追加し、新しい検査法と治療法についても概説した。心臓カテーテル検査の中心である冠動脈造影は、肉眼的な狭窄の評価に基づく解剖学的評価法が中心だった。そこに肉眼的な形態ではなく冠循環の生理に基づく機能的評価法である心筋血流予備比が臨床の現場に導入され注目されている。また、先天性心疾患や弁膜症などの構造的心疾患（Structural Heart Disease）に対してカテーテルを用いて治療する分野が急速に台頭している。従来は心臓血管外科の独壇場であった分野だが、循環器内科医が診断だけでなく治療に積極的に関与することが可能となってきた。これらの新しい分野は特に本書の対象読者である若手医師の好奇心と探求心を引き立てると考えた。この分野においても、本書の読者が近い将来に中心的な術者となって治療を行い、情報発信していくことを夢みている。

初版から本書の企画・製作に尽力いただいている鈴木美奈子氏の頑張りには本当に感謝している。改訂版の企画では、嶋田達哉氏にも加わっていただき感謝している。今後、心臓カテーテル検査・治療が正しく普及し、心臓病に悩む患者さんたちに福音をもたらすことに、本書がわずかでも貢献できることを願っている。

2014年1月

中川義久

初版の序

循環器疾患の診断において心臓カテーテル検査は非常に重要である。そのなかでも患者数の増加が著しい冠動脈疾患では、心臓カテーテル検査は診断だけでなくPCIという治療法と表裏一体の関係にある。将来PCIの修得を希望する若手医師が多い現在、その基本である心臓カテーテル修得に対するニーズは大きい。しかし、心臓カテーテルでは重大な合併症が起こりうるため、基本手技・血管造影所見の読影力を確実に身につけることが重要である。

小生が研修医時代に循環器内科医を志し、ようやくチームの一員として心臓カテーテル検査に加えてもらった頃の思い出を述べる。冠動脈造影の所見を全く読むことができず、カンファレンスで先輩の医師が「前下行枝の7番に90%狭窄」などと瞬時に反応する言葉が神業のように感じた。毎夜、シネフィルム10本をじっくり見ることを日課として続けるうちに少しずつ読めるようになった。当初は、「自分には冠動脈造影という画像情報を理解する能力が欠如しているのだ」と絶望的な気持ちであった。そのときに心臓カテーテル検査や冠動脈造影についての初学者向けの、理解しやすく実践的な書物を探したが無かった。

そこでこの度、心臓カテーテルを初めて学ぶ医師のための手技マニュアルとして本書を企画した。すべての解説に写真やイラストをつけると同時に、基本手技・造影所見の読影についてのコツを随所に盛り込むことで、理解しやすい入門書を目指した。特に冠動脈造影像の読影力アップのため、造影所見には詳細なシェーマを添えた。初学者がつまづきやすい内容を集めたトラブルシューティングを掲載し、既刊本と比べ、より臨床で役立つ実践的な内容を意図した。

本書の企画を理解し、原稿を執筆してくれた先生方に感謝する。執筆陣は現場で多数の検査を実施している方々に依頼した。これが本書の内容に臨場感を加えているものと思う。また、本書の企画から発刊までを応援してくれた羊土社編集部の鈴木美奈子女士、深川正悟氏、佐々木幸司氏に感謝する。

2009年5月

中川義久